随想「天上の星の輝き」授業試案

――〈井上靖が出会った三つの言葉〉から〈私の思い出の言葉〉へ――

高木伸幸

はじめに

井上靖文学は、かつて多くの作品が教材として国語教科書に掲載されていた。しかし平成十年度前後から徐々に採録数が減り、二十年代に入ると一時完全に姿を消してしまった。しかし近年、詩「出発」(1)や小説「利休の死」(2)「孔子」(3)などが再び国語教材として取り上げられ、復活傾向にある。本稿ではかつて高等学校二年生用の国語教科書に掲載されていた井上靖の随想「天上の星の輝き」を取り上げる。同作が国語教材として持つ特色を検討しつつ、その授業案を記す。

一

井上靖の「天上の星の輝き」は昭和五十八年度から平成六年度まで明治書院『精選国語Ⅱ』に採録されていた(4)。昭和四十九年五月五日から翌年一月二十六日まで『毎日新聞』日曜版に連載された「わが一期一会」の第十六回が出典である。原文では「人生について②」の副題が添えられている。『精選国語Ⅱ』では「人生への開眼」と題する単元の下、巻頭教材として取り上げられていた。

「天上の星の輝き」は、井上靖が少年期から青年期までに出会った三つの言葉に対する思い出を順次記している。

まず小学校時代に若い代用教員より教えられた言葉「克己」について。「その若い教師のおかげで、〝克己〟ということが

一生を過ごしていく上に、いかに大切であるかということだけは知っている」。

次いで旧制高校時代に籍を置いた柔道部において、上級生から聞かされた言葉「練習量がすべてを決定する柔道」。「わたしは上級生の一人の言葉に、若い日の三年間をかけた」「そのときは、その言葉がそれほど魅力あるものに思われた」。

さらに大学へ進むころに友達から教わった言葉「――ああ、いかに感嘆しても感嘆しきれぬものは、天上の星の輝きと、我が心の内なる道徳律」。カントの「実践理性批判」収録の一節であり、本教材のタイトルもここから採られている。「この言葉には漠然とではあるが、生きることに勇気を感じさせるような魅力があり」「人生というものに対する根源的な考え方を、この言葉によって心に刻み付けられてしまった」。

以上の内容を一行四〇字で一〇八行、おおよそ四〇〇〇字で記している。高等学校の国語教材として長過ぎず、短過ぎず、適切な分量と言える。文体は比較的平易である上に、小説の一場面のごとく、読み手に情景を想起させる表現も用いられている。一人の人間の少年期から青年期に至る精神的な成長を凝縮した物語の趣もある。

本教材の対象である高等学校二年生は、今まさに青年期の入り口に立っている。そうした彼らに対して、青少年期の心の変遷を文学的な香りを以って表し、人生とは何かを問いかけた国語教材と言える。既に国語教科書から外れて二十年以上経過しているが、その内容、文章表現は、平成が終わり、新元号に入った今日においてなお、高校生に学ばせるべき普遍性を持とう。年度初めの巻頭教材としてはもちろん、投げ込み教材としても、高校国語科の授業に取り上げる価値は十二分に認められる。

二

「天上の星の輝き」の授業案を考えてみたい。対象は掲載された『精選国語Ⅱ』に準じて高校二年生を基本とし、生徒の状況に応じて、三年生や一年生も視野に入れた授業とする。

本教材は、先に触れた通り文章表現自体は比較的平易である。だが「代用教員」や旧制の「中学校」「高等学校」等については、現代の高校生には馴染みの薄い注意事項として、難語句と併せて補っていく必要があろう。

また本文中、三つの言葉がどのような意味を持ち、筆者が如何なる気持ちを抱かされたのか、説明は必要最小限に抑えられている。従って三つの言葉を学ばせるにあたって、十分に時間を割き、丁寧に読み取らせていかねばなるまい。言葉それぞれに対して、ただ意味を把握させるだけでなく、より深い理解へ至らせるために、学習者の身近な経験に引き付け

させ、共感を引き出していく指導も大切であろう。

そこで以下のような授業を提案する。まず教師による支援の下でワークシートを有効に活用し、三つの言葉の意味内容を十分に理解させる。次いで学習者に自分の経験に即した感想、作文を、これもワークシートを活用しながら書かせることで、共感を伴ったより深い理解へと発展させていく。

指導案の略案を記す。

1．教材名

随想「天上の星の輝き」（井上靖）（明治書院『精選国語Ⅱ』昭和五十八年度版）

2．教材の目標

井上靖が少年期から青年期にかけて出会った三つの言葉より如何なる人生観を身に付けたか、学習者自身の経験に重ねつつ読み取った上で、自らの「思い出の言葉」について文章化することができる。

3．教材の評価規準

ア、国語への関心・意欲・態度

井上靖が出会った三つの言葉について、筆者の立場に即して理解できるとともに、自らの経験に置き替え、より深く読み取る姿勢が見られる。

イ、読む能力・書く能力

・井上靖が出会った三つの言葉の意味について、筆者の立場を踏まえつつ正確に読み取ることができる。

・井上靖が出会った三つの言葉の意味を自らの経験に置き替え、より身近な意味を持った言葉として捉え直すことができる。

・学習者自身の「思い出の言葉」を見つけ、自分の言葉を用いて文章化できる。

ウ、言語についての知識・理解・技能

語句の意味を理解し、文学的な文章として、教材を読み味わうことができる。

4．指導対象・指導観

本稿の考察参照。

5．指導計画（五時間）

第一時

・教師による範読を聴いた後、全文を黙読し、意味のわからない事項、語句をチェックする。

・難語句・注意事項をワークシート①（資料Ⅰ）の所定欄に抜き出す。辞書を活用しながら、教師から補足説明を受けることで、それらの正確な意味を把握する。

第二・三時

・教師との一問一答を通して、ワークシート②―段落（一）

（二）（三）（資料Ⅱ）の所定欄をそれぞれ埋め、段落ごとに出てくる三つの言葉の意味を把握する。

第四時（本時）

・三つの言葉から受けた感想をワークシート②―段落（一）（二）（三）の所定欄にそれぞれまとめる。

・「私の思い出の言葉」について、（一）「先生（親）から教わった言葉」（二）「友達（先輩）から教わった言葉」（三）「本から教わった言葉」の三つより一つを選ぶ。各自の思い出の言葉にまつわるエピソードやその時の心情等をワークシート③（資料Ⅲ）の所定欄に書き込む。

第五時

前時のワークシートを参考にしながら、「私の思い出の言葉」（八〇〇字）を作文する。

6. 本時の目標

・井上靖が出会った三つの言葉について、学習者自身の経験と重ね合わせて感想文を書くことができる。

・自分にとって深い思い出となった言葉を見つけ、そこから学んだ内容をワークシートにまとめることができる。

7. 本時の展開（第四時）

	学習活動	指導上の留意点
導入（5分）	(1) 前時の復習をする。	・前時に記入したワークシート①および②―段落（一）（二）（三）を読み返させ、「難語句・注意事項」「三つの言葉の意味」「筆者は何を学んだか」を思い出させる。
展開（40分）	(2) 「三つの言葉」から受けた感想をワークシート②―段落（一）（二）（三）に書く。 (3) 「私の思い出の言葉」を考え、ワークシート③にまとめる。	・「三つの言葉」から受けた感想をワークシート②―段落（一）（二）（三）の「あなたの感想」欄にそれぞれ書かせる。 ・（一）「先生（親）から教わった言葉」（二）「友達（先輩）」から教わった言葉」（三）「本から教わった言葉」の中から一つを選ばせる。各自の思い出の言葉にまつわるエピソードやその時の心情等をワークシート③の所定欄にできるだけ詳しく記入させる。
まとめ（5分）	(4) 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を知る。	・本時の学習内容を確認させる。 ・次時はワークシートを参考にしながら、「私の思い出の言葉」（八〇〇字）を作文することを伝える。

資料Ⅰ（サイズはＢ４）

「天上の星の輝き」ワークシート①難語句・注意事項　　氏名（　　）

頁・行	語句・事項	意味

資料Ⅱ〈サイズはＢ４。段落（二）は（三頁十四行～六頁六行）、（三）は（六頁七行～八頁十六行）。（二）（三）の資料掲載は略〉

「天上の星の輝き」ワークシート②―（二）　　氏名（　　）

筆者が学んだ三つの言葉（第一段落・二頁一行～三頁十三行）

筆者が学んだ言葉	その言葉の意味	筆者が受けた影響（どう思った？何を学んだ？その後どうした？）	あなたの感想
何時学んだ？			
誰から学んだ？			

資料Ⅲ〈サイズはB4。（一）「先生（親）から教わった言葉」（二）「友達（先輩）」から教わった言葉」（三）「本から教わった言葉」の中から一つを選ばせる。〉

「天上の星の輝き」ワークシート③　氏名（　　）

（　　）から教わった言葉

どんな言葉？	何時・どこで・誰（何という本）から？	どう思った？何を学んだ？その後どうした？

三―（一）

以上の指導略案に沿って、随想「天上の星の輝き」の模擬授業を試みた。別府大学「国語科教育法Ⅲ」の時間を利用し、本稿執筆者（高木）が授業者（教師役）、受講生十名（いずれも三年次生）が学習者（生徒役）をそれぞれ務めた。全五時の指導略案の中からワークシートの活用に関する部分および第五時配当の作文を主に取り上げた。二〇一九年五月二十一・二十八日の二回に分けて計一八〇分間で実施した。

初めに一人一文ずつ分担して全文を音読させた上で、「難語句・注意事項」の指導については、今回は学習者が大学生であるため、口頭で説明するのみに留めた（音読と語句指導を合わせて約二十五分間使用）。高校生を対象とする実際の授業では、指導略案に記した通り、辞書等を活用させながら、ワークシート①に書き込ませていかねばならない。

ワークシート②を用いた指導においては、時間の制約から段落（二）のみに絞った。三つの言葉の中でも、段落（二）には、部活動・サークル活動の経験等から大学生・高校生にも比較的親しみやすい言葉が扱われていると思われるからである。

まずワークシート②の中から、「あなたの感想」を除く部

分、つまり「筆者が学んだ言葉（「何時学んだ」「誰から学んだ」）」「その言葉の意味」「筆者が受けた影響（どう思った？何を学んだ？その後どうした？）」について、それぞれ所定欄に約十五分間で書き込ませた。その上で、学習者を一人一人指名し、答えさせながら、各欄に記入すべき内容を、これも約十五分間かけて確かめていった。それぞれ以下のような内容を記述すべきことを押さえさせた。

・「筆者が学んだ言葉」＝「練習量がすべてを決定する柔道」。
・「何時学んだ？」＝「金沢の高等学校」の頃、「柔道部」に入って「気持ちのまだ決まっていない時期」。
・「誰から学んだ」＝「上級生のT」。
・「その言葉の意味」＝「体格に恵まれない非力な青年たちが、試合で勝つ」ために「決して立たない」「寝技だけの柔道」に取り組めということ。
・「筆者が受けた影響」＝「正確という言葉が輝いて感じられ」、その言葉が「魅力あるものに思われた」。その言葉に「若い日の三年間をかけた」。

次に段落（二）の言葉をより実感を持って捉えさせる手掛かりとして、学習者に部活動の体験など、自分が強く打ち込んだ出来事について約十分の時間を割いて語らせた。その上

資料Ⅳ

「天上の星の輝き」ワークシート②ー（二）
筆者が学んだ三つの言葉（第二段落・三頁十四行～六頁六行）

氏名（　　）

筆者が学んだ言葉	何時学んだ？	誰から学んだ？	その言葉の意味	筆者が受けた影響（どう思った？何を学んだ？その後どうした？）	あなたの感想
練習量がすべてを決定する柔道	高校一年 金沢の高校入って間もない頃 気持ちの決まってない頃	Tという上級生	寝技本位の柔道	練習量がすべてを決定する柔道というものがあるなら、やってみよう ↓ 正確な柔道 正確という言葉に輝きを感じこの言葉によって筆者は高校どの三年間の生き方を決めた 寝技で勝敗を決めるのは、体格に恵まれぬ非力な青年たちが試合で勝つための一つの方法であった	私には、自分の制系というか座右の銘がない 小学生や中学生の頃は筆者と同じようにスポーツをやっていましたが、先ほどいう言葉には似かわしくないような練習ばかりだ。たように（今となっては）感じる。 筆者は高校の三年間の生き方を決定させるような言葉に出会った。私には、そのことが羨しいと感じられた。これまで自分をつき動かしてくれるような、また自分の生き方を変えたり決定させたりするような言葉に出会ったことがない。 私が学生時代に、もしも…そのような言葉に出会っていたら何か変わっていたのだろうかと考えてみた。 高校の時は勉強もせず怠惰に毎日を過ごしていたので、高校の時に（特に）出会っていたかったなあと思った。

で、ワークシート②に残った「あなたの感想」を約二十五分間で書かせた。基本的には生徒役の高校生の立場であるが、より正確な感想として、現在の大学生の立場から書くことも許容した。

資料Ⅳには、学習者が記入したワークシート②の一例を挙げた。J・Wさんが記入したこのワークシートには、記入すべき事項が丁寧に整理されている。中でも「あなたの感想」においては、自身のスポーツ体験と比較しつつ、筆者が出会った言葉の大きさに言及しており、自身の問題に引き付けて解釈しようとする姿勢が表れている。J・Wさんは段落（二）の要点を十分に把握できたことが、ここから確かめられよう。

その他の学生が記入したワークシートの中から、「あなたの感想」の部分のみ三例を挙げる。

柔道部に入ったばかりで、まだ気持ちの決まっていない時期に上級生から言われた言葉に、主人公は高校の三年間をかけている。ここから、主人公にとって、上級生Tの放った言葉の影響がかなり大きいものであったということがわかった。そして、人の人生は他人であっても〝言葉〟次第で大きく変えることができるということが読み取れた。自分にも、気を付けてはいなくても人の言葉で生き方が変わっているということがあるのではないかと考えた。今は、これといった自分の心に留めている言葉はないが、いつも心にある言葉をもっておくことも良いと思った。これから先、人と話す際、人の言葉一つひとつが人生を変えるかもしれないと思いながらきくことも面白いと感じた。

（Y・Mさん）

筆者は高等学校時代に入って三年間柔道にかけ、力がなくても勝てるような寝技の柔道をしようとしたことに少し共感を持った。弱くても勝つために必死でなにかに取り組むことは簡単なことではない。

私も練習量で大抵のことは上手くいくと思うが、練習量だけでは上手くいかないこともたくさんあると思った。その多くの量の中には質ややる気がないと決してうまくいかないのではないか。よって三年間、その言葉だけを信じて柔道に取り組んだ奥には、きっと筆者のやる気や練習の中身がよかったことが関係していると考える。

練習量が全てだと言うその根本には、小学校の頃に青年から教わった克己というのもあるのではないかと考えた。

（R・Iさん）

この本文を読んで、私も似たように性格、人格を変え

るような言葉に出会ったことがあるから、共感できた。

私自身の経験にあった話になるが、どうでもいい人からの言葉はどれほど良いことを言っていようが心には響かない。自分の憧れている人の言葉はよく頭に残っている。

もっとも中学の頃は思い返しても漠然としており、理想というものがそんなに具体的にはなかった。しかし高校生になると進路のこともあり、自分の考えも具体的になってくる。この本文が高校の教材ということは、つまり、そういうことも含まれているのではないだろうか。自分の人生における「教訓」のようなものをみつけること、また憧れや、理想の自分をみつけること、それを考えさせられる内容だった。

（K・K君）

Y・Mさんは自分にも気付かないところで言葉の影響を受けた可能性を指摘し、K・K君においては、自身の中・高校時代と照らし合わせて本文の内容を読み取っており、ともにJ・Wさんと同様、自身の問題と引き付けて解釈しようとする姿勢が見られる。またR・Iさんは、「練習量がすべてを決定する柔道」を続けられた筆者の内面に踏み込んだ上に、それを一段落の「克己」と結びつけている。より広く深い読解が為されていると言えよう。

右の四例とも言葉が持つ影響力の大きさについて記し、本文の主題を的確に把握できている。大学生による文章とは言え、二十五分間という限られた時間の中で書いたことを考えると、「柔道部体験」を扱った当教材の段落（二）は、当初予想した通り、高校生・大学生にとって、比較的親しみやすい内容であることが裏付けられたと言えよう。

なお今回の模擬授業では取り上げなかった段落（三）のカントの言葉「――ああ、いかに感嘆しても感嘆しきれぬものは、天上の星の輝きと、我が心の内なる道徳律」については、高校生を対象とした現場の授業でも、具体的な意味内容にまで踏み込んで解釈させる必要はないと判断される。井上靖がこの言葉から感じ取ったのは、具体的なそれではなく、「漠然と」した魅力、それまで知らなかった「哲学の言葉」が持つ「高級」な雰囲気であった。筆者自身が記す通り、「この言葉を正確に理解するためには、少なくとも『実践理性批判』の一冊くらいは読まなければならない」。一つの教材の学習の中で、それだけの時間を取るのは困難であり、適切とも言えない。従って、この言葉の指導に際しては、意味内容の解釈は本文中の説明を押さえるに留める。むしろ「哲学の言葉」が漂わせている独特の雰囲気を感じ取らせることが重要であり、さらにその雰囲気に魅かれた筆者の心境を理解させることに比重を置くべきであろう。

掻い摘んで記せば、難解であるが故の知的な雰囲気こそ、井上靖がこの言葉から感じた「高級」感であり、筆者はその知的な雰囲気の中に、漠然とではあるが、人生とは何かを考えさせる重要な要素が入っているように感じた。概ねそのような理解に至らせれば十分と言える。

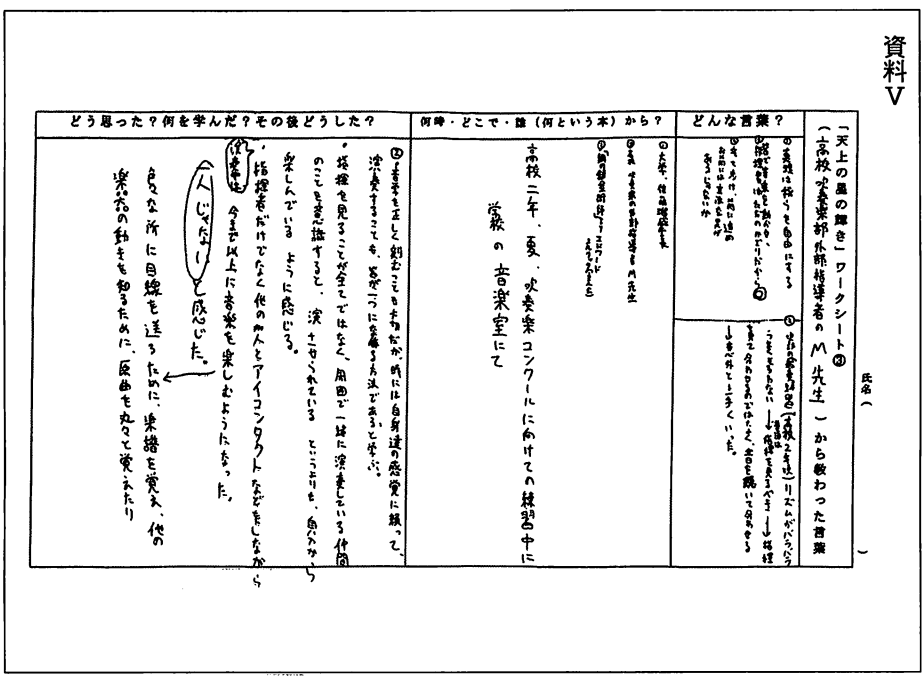
以上が模擬授業の第一回目、前半の九十分間である。

三―(二)

模擬授業の第二回目、後半の九十分間は、「私の思い出の言葉」の執筆へ向けて、構想メモを取らせることから始めた。学習者には（一）「先生（親）から教わった言葉」、（二）「友達（先輩）から教わった言葉」、（三）「本から教わった言葉」の中からテーマを一つ選ばせた上で、ワークシート③の所定欄に自分が取り上げたい言葉、紹介したいエピソード等を三十分間で記入させたのである。取り上げたい言葉がいま一つはっきりしない学習者には、候補を幾つか書き出させ、その中から一つに絞るよう指示した。

資料Vに学習者が記入した一例を挙げた。記入者のM・N君は、①～③の三つの候補を記した上で、その中から②「皆で音楽を動かせ、指揮者はただの飾りだから」（高校吹奏楽部外部指導者M先生から教わった言葉）を最終的に自分の思い

資料V



出の言葉として選んでいる。メモを取りながら、自分の考えを整理していったことが確かめられる。

約十分の休憩を挟んだ後、五十分間で、本授業の仕上げとなる作文「私の思い出の言葉」に取り組ませた。ワークシート③の構想メモを参照させながら、文字数は八〇〇字を目標とし、時間の制約から六〇〇字以上を書けたら合格とした。若干の字数の超過もよしとした。

資料Ⅴに例を挙げたM・N君は、そのワークシート③を参照しながら、次のような文章を書いた。

私が今まで生きてきた中で心に残っている言葉は、高校二年生の時に入っていた吹奏楽部の外部指導者であったM先生の言葉だ。吹奏楽部は当時三十人程度で、県のコンクールですら毎回銀賞止まりの弱小高校であった。二年生の夏の時期、既に県のコンクールに向けた練習が行われており、クーラーも扇風機もない音楽室で毎日合奏練習をしていた。しかし、何回合わせても全体の音がそろわず、何度注意されても誰かの音が遅かったり、速かったり、段々とピリピリした空気が全体を支配していった。そんなある日、いつも前に立って指揮棒を振っていたM先生が、おもむろに指揮棒を置きこう言った。「しばらくは指揮なしでやってみろ」。いつものやさしい口調、表情のまま、私達に言ったのだ。こっちからすると、全くそろう気配のない状況に呆れて指揮をする気が失せたように見えて、その時私はとても恐ろしかった。困った顔を見合わす私達に、M先生はさらに続けてこう言った。「音楽を作るのは指揮者じゃなく君達自身だ。大切なのは君達全員が互いの演奏を信頼することだ。それができていれば、指揮者なんてただの飾りなんだ」。それまで私達は、自分のことばかりに精一杯になっていた。だからこそ、そろわなかったのだ。そして指揮なしでの合奏練習がコンクール一週間前まで続いた。いつも下を向いて演奏していた人や、楽譜に夢中になっていた人、指揮をずっと見ていた人、これらのバラバラの視線は、互いの目に向かった。それまでに無い不思議な練習だった。そして何故だか私達の音はそろうようになっていった。コンクールの練習であることも忘れて、盛り上がり、笑顔があふれるような、そんな日々だった。互いに音楽を合わせていくようになってから、私は本当に音楽を楽しいと感じるようになった。その年の県コンクールでは、初めて金賞を取ることができたのだった。

それまで「自分のことばかりに精一杯」だった吹奏楽部員達が、M先生の言葉を受け、「互いの目」に気持ちを向けるよ

うになった。以来劇的に変化していく状況が見事に伝わってくる。「金賞」獲得という結末も、事実に基づくだけに読む者の心を打つ。ただ、書き出しから終わりまで段落がない分、話の切れ目が確認しづらく読みにくい。模擬授業終了後に全体を四段落程度に分けるよう助言した。センテンスが長すぎて途中で区切った方がよい一文や、接続詞を入れた方がわかりやすい部分等についても添削指導した(5)。

他の学習者九名の中から、さらに以下の二例を紹介しよう。

はじめにY・Eさんの「先輩から教わった言葉」。

私が人生に関する言葉を初めていわれたのは、高校一年生の頃であった。当時、私は高校に入ってすぐに弓道部に籍を置いた。中学生の頃、体験入学で来た時から絶対に入部しようと決めていたのである。しかし、いざ弓道部に入ったはいいが、先輩がとにかく厳しかった。一年生の半年間は毎日、筋トレが基本だと言われ、想像を上回る練習が続いた。同級生は数十人ほど入部していたのだが、日が経つほど少なくなっていき、とうとう私も含めて八名になった。練習前の掃除や準備は一年生が主体でするのだが、少人数となった一年生だけでこなすには難しい状況が続いた。そこで私はできるだけ早く来て、誰よりも先に掃除も準備も終わらせてしまおうと考えた。それを繰り返す内に、一ヵ月後には一人で全て仕上げてしまうようになった。すると、一つ上の女性の先輩から、「毎日頑張らなくてもいいよ。あとね、私はすごく感謝してる。ありがとう」と言われた。正直、この言葉をもらうまでは誰に感謝されなくてもいいし、頑張りが認められなくてもいいと思っていた。掃除を終えた道場を見て、「終わってるんだ」としか言わなかった人達に怒るわけでもなかった。自分が勝手にしたことだから他人がどうも思わなくても当然だと思っていたのだ。だが、一人の先輩の言葉によって、頑張らなくてもいいという中に自分の努力は少しは伝わっていたと感じることができた。その時は直接的に、「頑張ってるね」と言われるより言葉の重みを痛感した。時々、その先輩は声を掛けてくれ、私は頑張りすぎないようにするのではなく、逆にやる気を出して頑張っていこうと決意した。以前までは考えたこともなかった、誰かの為に努力する心持ちに気付けたのだ。先輩が卒業し、後輩が入ってからもずっと三年間、どこかで誰かが喜んでくれたらどんなことでも頑張れるという気持ちで部活動を続けてきた。今でも誰かの為に努力する楽しさは忘れていない。

高校時代の部活動における先輩の言葉を取り上げ、その言

葉の裏側にあるさりげない優しさ、心遣いを汲み取っている。直接的でない言葉を自力で解釈し、誰かの為に頑張る大切さに気付いていくところに、Y・Eさんの思考の深まりが感じられる。ただ、この文章においても、段落分けが為されていない分、やや読みにくかった。M・N君と同様、模擬授業後に全体を四つの段落に区分するよう指導した。一部の言葉遣いや意味の通りにくい部分についても修正させた(6)。

次にJ・Wさんの「漫画『あひるの空』から教わった言葉」。

私は、小学校の頃からバスケをやっていたこともあり、バスケの漫画をよく読んでいた。バスケを題材にした作品は数多くあったが、その中でも私が特に惹きよせられた作品があった。題を「あひるの空」といい、作者は日向武史先生だ。この作品は、スポーツ漫画にありがちな不良生徒が挫折と再生を繰り返しながら上を目指すといった話だ。

「あひるの空」には、たくさんの名言が書かれていて、そのほとんどに心を動かされた記憶がある。数多くある中で一つに絞るのは難しいことだったが、振り返ってみれば私が特に心を動かされた言葉があった。——自分の努力の足りなさを他の何かのせいにするな——と書いてあった。

当時、中学三年だった私は、膝の手術やリハビリ、さらに受験勉強といった精神的にも体力的にも追い込まれている状態だった。バスケをしている人を見れば膝さえ治ってくれたら……と思い、成績が上がっている人を見れば私は調子が悪いから……といって逃げていた。本当に荒んでいた時期だった。リハビリをしても治らない、勉強をしても成績が上がらない。何もかもを他の何かのせいにして自己保身ばかりしていた。そんな時に、この言葉に出会った。私は泣きそうになったし、後悔もした。結局は自分の努力が足りないが故の結果だったのだと思った。作品の中の登場人物たちは、無様な思いをしても、希望が目の前で断たれても、他人から期待なんてされていなくても、どんな状況にあっても常に努力はしていた。人間味あふれる行動ばかりで格好よかった。私は、今までの自分の言動が恥ずかしくなり、少しずつでもいいから自分の弱い考えを変えていこうと意識し始めた。思考や性格を変えるというのは簡単にはできなかったが、自分の中で明るい何かを感じることが出来た。

今では、「あひるの空」は私の愛読書になり毎日読んで励まされている。人生で良い作品に出会えたことが嬉しいと思えた。

愛読する漫画の言葉を通して何を学んだか、中学時代の自分の状況と併せて細かく具体的に回想している。当時のJ・Wさんの辛い気持ちや、その言葉に出会った際の感動が読み手に素直に伝わってくる。「あひるの空」の紹介文としても成り立っていよう。言葉遣いや文章構成においても大きな欠点はなく、五十分の時間内に仕上げた文章としては上出来と言えよう。

右に引用した三作は、いずれも自立した随想の趣がある。学習者が教材の本文を的確に読み取った上で、自分の問題に引き付け、自らの言葉で再構成した文章と言える。実際の高校生を対象にした授業では、このような水準に達していれば十分合格であろう。

おわりに

井上靖の随想「天上の星の輝き」は、特に第二段落の内容が学習者には親しみやすく、今回の模擬授業では、それぞれの思い出の言葉を狙い通り想起させることができた。

当授業試案では、三つのワークシートを用い、本文読解から感想文、「私の思い出の言葉」の作文へと発展させていった。この段階を踏んだ指導法により、学習者は無理なく、自然な形で考察を深められたとも言えよう。

国語教材としての井上靖文学を考察する一資料として、随想教材の指導法の一試案として、本稿を参考にして頂ければ幸いである。

注

(1) 昭和二十二年一月一日『少国民新聞』掲載。学校図書『みんなと学ぶ・小学校国語六年上』に平成二十七年度（二十六年三月検定済）より巻頭教材として採録。

(2) 昭和二十六年四月『オール読物』掲載。学校図書『中学校国語2』に平成二十八年度（二十七年三月検定済）より「過去を超える回想の力――井上靖・歴史小説の世界」として、小説「孔子」とともに採録。

(3) 昭和六十二年六月より平成元年五月まで『新潮』に連載。学校図書『中学校国語2』に平成二十八年度（二十七年三月検定済）より「過去を超える回想の力――井上靖・歴史小説の世界」として、小説「利休の死」とともに採録。

(4) 昭和五十七年三月、六十年三月、六十三年三月、平成三年三月各検定済。

(5) 例えば以下のように文言を修正させた。

・（修正前）「二年生の夏の時期、既に県のコンクールに向けた練習が行われており、クーラーも扇風機もない音楽室で毎日合奏練習をしていた」→（修正後）「二年生の夏、既に県のコ

ンクールに向けた練習が行われていた時期だった。クーラーも扇風機もない音楽室で毎日合奏練習をしていた」

・(修正前)「こっちからすると、全くそろう気配のない状況に呆れて指揮をする気が失せたように見えて、その時私はとても恐ろしかった」→(修正後)「しかし、生徒側からすると、全くそろう気配のない状況にM先生が呆れて指揮をする気持ちを失ったように見えた。その時私はとても恐ろしかった」

(6) 例えば以下の通り文言を修正させた。

・(修正前)「私が人生に関する言葉を初めていわれたのは」→(修正後) 私が人生に関する言葉を初めて語りかけられたのは」

・(修正前)「だが、一人の先輩の言葉によって、頑張らなくてもいいという中に自分の努力は少しは伝わっていたと感じることができた」→(修正後)「だが、『頑張らなくてもいい』とその先輩が言ってくれたのは、私の努力を少しでも感じ取ってくれたからだと思えた。その言葉のおかげで自分の努力は伝わっていたのだと実感できた」

(たかぎ・のぶゆき　別府大学教授)